

<報 告>

日本統治時代の台湾生活誌 (IX)

柴 公 也

(33) 沖縄から朝鮮と台湾の学校で

新正元 (1919 年生) 沖縄県立農林学校 ; 平壤師範短期講習科卒

私の故郷は、八重山群島の竹富島です。父は、竹富小学校の尋常科を終えて石垣島に渡り、登野城小学校の高等科に入りました。卒業後、竹富村の役場に入り、書記をしておりました。母も竹富島の生まれで、父と同様に登野城小学校の高等科を終えています。明治の竹富の女性としては、高等教育を受けたインテリ女性と言えるでしょう。私は、この両親の下で五人きょうだいの長男として生を享けました。

竹富小学校は、一学年一クラスで、一クラスは 20~30 人でした。校舎は木造の平屋でした。席は、男女が左右に分かれていました。講堂はなく、学芸会などの時は、教室の仕切りを取り外して使用しておりました。先生方は竹富や石垣の人で、女の先生もいましたが、本土の先生はおりませんでした。朝会は、毎日ではなかったような気がします。校長先生の訓話がありました。ただ、宮城遥拝はなかったような気がします。

私は、尋常科に入った時、先生の話す標準語が解りませんでした。国語の教科書は「ハナ・ハト・マメ」から始まっていましたが、先生は、方言を交えて教えてくれました。授業中は標準語ですが、友達とは方言で話しておりました。一年の二学期頃から、先生の話す標準語が解るようになりました。方言を交えて何とか話せるようになったのは、二年生になってからでした。上級生になると、方言札というのがあって、方言を話すと首に掛けさせられました。

制服や帽子はなく、たいてい着物に裸足でしたが、私は父に買ってもらった運動靴を履いておりました。カバンはなく、風呂敷に教科書を包んで通っておりました。低学年の頃はノートや鉛筆ではなく、黒い石板に白い石筆で字を書いていたのです。

弁当は、芋ではなく白米でしたが、おかずは豆腐のチャンプルーが定番でした。竹富島には水田がなかったのですが、西表島に水田があって、船で通って耕作していたのです。時折、梅干も詰めていきましたが、梅は鹿児島から来ていたようです。運動会や学芸会の時は、父兄が来場して弁当を広げておりました。運動会は、現在と同じ

で、駆けっこ、騎馬戦、玉入れ、リレーなどでした。

尋常科を卒業して、無試験で竹富小学校の高等科に進みました。高等科では、着物に袴で、帽子を被っておりました。教科は、国語・代数・幾何・地理・歴史・修身・体操・音楽・図工などがありました。先生方は尋常科と同じでしたが、英語や軍事教練はありませんでした。

高等科を終えて、昭和8年に、沖縄本島の嘉手納にある県立農林学校（*三年制）に入学しました。嘉手納は、戦前の沖縄中部の要衝で、那覇からの軽便鉄道の終点でした。農業が盛んで、製糖会社、警察署、農林学校などがあり、中部の経済・文化・教育の中心地だったのです。

試験は本島ではなく、他の本島の中等学校と一緒に、石垣島の登野城小学校で受けました。当時、竹富から那覇までは汽船で二泊三日掛かっていたのです。高等科には大部分の人が行きましたが、中等学校に行ったのは私一人だけでした。高等科を出た生徒は、たいてい仕事を求めて台湾に渡っておりました。皆、親の元に品物を沢山送ってくるので、郵便局には台湾からの品物が一杯積まれていました。台湾は豊かな島というイメージだったのです。

農林学校は、一学年二クラス（*東組と西組）で、一クラス40人でした。三年になると、農科と林科に分かれましたが、私の進んだ林科は、15人だけでした。先生は、本土の専門学校や大学を出た方たちでした。校舎は、一部二階建ての沖縄様式の木造で、屋根は瓦葺でした。制服と制帽があって、靴を履き、風呂敷ではなくカバンを提げて通っておりました。学校の中では、竹富と本島の方言では通じないので、他の学生とは標準語で話しておりました。ただ、他の本島の学生同士では本島の方言でも話していました。

農業や林業の専門科目のほかにも、国語、代数、幾何、理科、歴史などを勉強しましたが、英語も勉強しておりました。また、教練の時間もあって、大変厳しい訓練を課されました。三八銃での実弾射撃もあり、匍匐前進や夜間行軍もありました。ただ、配属将校から殴られたことはありません。

学寮に入っていましたが、一ヶ月13円仕送りしてもらっておりました。寮費が7円、授業料が3円、小遣いが3円でした。学寮は畳の部屋でしたが、一部屋に5～6人が入っていました。各自小さな机にあぐらをかいて勉強していました。朝は、一斉に起床して食堂で朝食を済ませていました。食事は、白米の御飯に沖縄料理のおかずでしたが、充分食べていました。風呂も毎日入れましたが、洗濯は自分でしておりました。先輩から制裁を加えられるということは余りありませんでしたが、それでも先輩は怖い存在でした。

昭和11年に林科を出ましたが、就職口がなかったので九月まで林科の助手をしておりました。その後、学校の推薦で平壤師範の短期講習科（*六ヶ月間で二級免状取

得)に入りました。教員を目指したのは、農林学校に入る前から、将来は教員になりたいと思っていたからです。ただ、台湾ではなく朝鮮の師範学校に行ったのは自分の意志ではなく、学校に割り当てられたからです。半年で教員の資格が得られるし、外地で教員になると六割の外地手当が付くので、それも大きな魅力でした。

平壤師範は、煉瓦造りで二階建ての威風堂々とした立派な校舎でした。二階の廊下には、オルガンが何十台も並べられていました。短期講習科には、全国の農林学校から推薦で来ておりました。一クラス 50 人で、朝鮮人はおらず、大部分が本土の人たちでした。私は本土の人間に馬鹿にされたことはないので、別に反感はありませんでした。先生は、内地の高等師範や大学を出た優秀な方々でした。平壤師範には制服、制帽があって、靴を履き、カバンを提げて通っておりました。

短期講習科では、教育学、教育心理学、教授法などの専門科目の他に、国語、代数、幾何、地理、歴史、体操、図工、オルガンなどを習いました。体操では、校庭に即席のリンクを造り、スケートをしておりました。教育実習は、付属の普通学校で一か月ぐらい行ったように記憶しています。ただ、講習科は短期なので、冬休みなどはありませんでした。

学寮に入りましたが、十二畳ぐらいの部屋に 5~6 人が入っておりました。師範学校は官費でしたが、寮費は自分で払っていたように思います。冬、外では耳覆いをしないと耳が凍傷に罹るくらい寒かったのですが、中はオンドル部屋で大変暖かでした。食事は、学寮の食堂で済ませていましたが、日本料理でした。風呂は、一週間に一、二回だったと思いますが、乾燥していたので別に不快感はありませんでした。ただ、洗濯は自分でしておりました。

平壤と那覇を比べると、平壤の方が大都市で近代的な街でした。平壤の市内では、内地人と朝鮮人は別に仲が悪いとは思われませんでした。食堂や映画館に入っても、朝鮮人からは反感や敵意などは全然感じられませんでした。当時、朝鮮人は確かに日本人ではあるが、内地人とは違う別の民族とっておりました。

昭和 12 年の 3 月、短期講習科を修了し、平壤から南東に 30 キロほど離れた中和郡の祥原普通学校に赴任することになりました。校舎は、木造の平屋でした。祥原は、まだ電気や水道が通ってなくて砂利道でした。

五年を担当しましたが、男女一緒のクラスでした。ただ、席は男女が左右に分かれていて、女子は少数でした。初任給は確か 40 円でしたが、六割の外地手当が付き、さらに宿舍料の 5 円が付いて計 69 円でした。父よりも高給取りで、内地でしたら校長先生の給料でしたから、生活には全く不自由しませんでした。

ある時、ボーナスを支給されたので、郷里の竹富島の親類に香典として 5 円を送ったところ、父に「こんな大金を香典に出すなんて、馬鹿なことするな」と、たしなめられたことがありました。また、在鮮中に一度竹富島に帰省しましたが、リング

100個を持って行って、近所の人たちに分けてあげたことがあります。皆、温帯性果実のリンゴは食べたことがなかったのです。

最初のクラスは五年生でしたが、皆日本語が話せましたので、朝鮮語が出来なくても何の不便も感じませんでした。教える場合も、特に朝鮮人ということは意識せずに教えておりました。子供たちは、二、三歳年齢が上の者もいましたが、皆従順で大変懐いてくれました。たとえ、子供たちが朝鮮語で話していても叱りませんでした。

最初は背広を来て教えていましたが、時局の変化に伴い、国民服を着て教えるようになりました。子供たちの服装は、男の子は大部分学生服でしたが、中には朝鮮服もありました。女の子は全員チマ・チョゴリの朝鮮服でした。さすがに朝鮮は寒いので、靴は皆履いていましたが、カバンはなく、たいてい風呂敷でした。

家庭訪問に行くと、親たちは余り日本語が出来ないので、子供たちが通訳をしてくれました。お土産をもらうことはありましたが、現金入りの封筒をもらうというようなことはありませんでした。運動会や学芸会では、父兄が来場して弁当を広げておりました。学芸会は講堂がないので、教室の仕切りを外して行っておりました。

祥原では、学校の側の朝鮮人の家に間借りしていました。オンドルの部屋でしたが、食事や風呂は校長の家のお世話になっておりました。朝鮮料理は辛かったのですが、直ぐ慣れてキムチも食べるようになりました。祥原には冷麺屋があって、食事をするに親切に接してくれました。

校長は内地人でしたが、教頭は朝鮮人でした。また、李という名の朝鮮人の先生もおりました。朝鮮人の女の先生もいましたが、皆トラブルを起こすことなく、仲良く付き合っていました。

祥原の朝鮮人たちとも親しく付き合っていて、内地人と朝鮮人が喧嘩することなど全然ありませんでした。郵便局長の一家などは、朝鮮人の集落の真ん中に住んでいましたが、何の問題もなく過ごしていました。祥原には映画館がなかったので、たまにバスで平壤に映画を見に行くことがありましたが、乗客たちからも反感などは微塵も感じられませんでした。ちなみに、若い男や女が官憲や軍隊に無理やり引っ張られて行ったというような噂は一度も聞いたことがありません。

私は、ずっと5年生を担当しましたが、上級学校に進学した子供たちは少なく、2~3名しかいなかったと思います。昭和15年に創氏改名があって、子供たちの名前が変わったことを覚えています。

祥原での暮らしは、別に不愉快なことはなく、子供たちも懐いてくれ、同僚の先生とも仲良く過ごしておりました。朝鮮人の食堂に入って食事もしましたが、別に敵意などは感じられませんでした。生徒の親たちからは、大変感謝されておりました。

昭和14年3月下旬の21歳の時、五ヶ月間の短期現役で平壤の歩兵第77連隊に入営しました。毎日の訓練は厳しかったのですが、殴られることはありませんでした。

古兵たちからは「お前たちは、五ヶ月で伍長になれて娑婆に戻れるから良いなあ」と羨ましがられておりました。軍隊に行っている間にも学校の給料はもらっていました。軍隊の給料も支給されていたと思いますが、幾らだったかは覚えておりません。

昭和 16 年になって、父に「お前は長男だから、遠い朝鮮ではなく近い台湾に移れ」と言われたので、台北にいる校長を務めていた叔母の夫を頼って、4 月に基隆の台湾人の学校である寿国民学校に移りました。校舎は、市内の中心にあって煉瓦造りの二階建ての堂々とした建物で、校庭も広いものでした。ただ、講堂はなかったように思います。校長は内地人で、教頭も内地人でした。台湾人の先生方もおりましたが、たいてい師範学校を出た人たちでした。

私は、五年生の男子組を担当しました。五年生ですので、祥原の場合と同様に、皆日本語は普通に話していました。ただ、祥原は田舎で、内地人は余りいませんでしたが、基隆は都会で、内地人が沢山いたので、基隆の子供の方が流暢だったような気がします。大人も祥原よりは基隆の方が良く通じました。子供たちは、時々台湾語を使っていたのですが、叱ったりしませんでした。

基隆では、特に台湾人ということは、意識せずに教えておりました。日本名に改名していた子供も何人かいましたが、朝鮮人の子供との違いも別に感じませんでした。それでも、自分たちは植民地の教員だという意識がありました。一視同仁で差別しないというのが建前でしたが、やはり内地人とは違う民族とっておりました。ただ、子供たちは良く懐いてくれ、親たちとも友好的に過ごしておりました。家庭訪問に行くと、親は喜んでお菓子やご馳走で接待してくれましたが、現金入りの封筒をもらうというようなことは全くありませんでした。

運動会や学芸会もあって、父兄が来場しておりました。朝会は毎日ではなく、一週間に一回ぐらゐの割で行なっておりました。祥原には神社がなかったので、神社参拝はしませんでした。基隆には基隆神社があったので、毎月 8 日に神社参拝をしておりました。

基隆は台湾の玄関で、内地人も多く、大変賑わっていたので、朝鮮よりは豊かという感じを受けました。朝鮮では、学用品が不足していたので、何でも節約して使っていたのですが、台湾では余り気にせず使いたくだけ使っていました。食料品もふんだんにあり、子供たちの着ている服も朝鮮より良いという印象を受けました。子供たちの服装は、男の子は学生帽に学生服で、女の子はセーラー服にスカートでした。ただ、朝鮮と違って裸足が多かったように記憶しています。

台北と京城を比べると、人口は京城のほうが倍以上多かったのですが、台北の方が近代的で賑やかな感じを受けました。生活という面では、田舎と都会の違いもあって、祥原よりは基隆の方がずっと住みやすかったのです。実際、基隆は電気や水道が通っていて、中心街は舗装されておりました。

基隆では、石垣島出身の知人の家の二階に下宿していました。基隆には、沖縄や八重山の人たちが大勢住んでいたのです。給料は、加俸も含めて80円は越していたかなと思いますが、良く覚えておりません。台湾では、朝鮮とは違って、沖縄の人間が馬鹿にされる場合がありましたが、私は国民学校の訓導でしたので、馬鹿にされるようなことはありませんでした。基隆では、台湾人の食堂で食事をしたり、映画も見ましたが、反感や敵意などは全然感じられませんでした。少なくとも、表面的には平和で友好的に過ごしていたのです。

終戦の報に接した時は、負けるとしていなかったもので、残念でなりませんでした。その一方で、これで戦争が終わったんだとホッとしたことも事実でした。ただ、負けた以上、アメリカに苛められるだろうと、内心不安でした。終戦後、私の周囲の台湾人の態度は変わりませんでした。警察官などが台湾人に報復されたという噂は聞いています。

翌年の昭和21年の2月に竹富島に帰って来ましたが、竹富島や石垣島は昔のままです。藁葺の家が並んでおり、電気や水道も通っておらず、中心街も砂利道でした。ただ、竹富島には四国の兵隊が駐屯していて、食料などを徴発されて島民が大分迷惑したという話です。私の父は兵隊に抗議したので、兵隊たちに「非国民！」と罵倒されたそうです。

終戦後、台湾から竹富島に二千人ほどが戻って来たので、島民は食料の確保に大変難儀しておりました。私は、早速4月から母校の竹富小学校で教鞭を執り、八重山での教員生活をスタートさせたのでした。

(34) 教育所の女先生

中園シゲ子(1921年生) 基隆高女卒；教育所勤務

父は四国出身で、母は大分の出身でした。父は大正3年頃、台湾に渡り、山地の警察官として勤務しておりました。私は、大正10年に五人きょうだいの長女として東海岸の蘇澳庄で生まれました。

大正13年の三歳の秋、父の任地キンヤンに移りました。小学校に上るまでの三年間、タイヤル族の子供たちと遊んで、駕籠を担いだり、機織の真似をしたりしたことが思い出されます。言葉は、お互いに日本語とタイヤル語のチャンポンでした。

タイヤル族の家は、半地下式で壁は丸太や割り木を横に積み、屋根はスレートで葺いておりました。部屋の四隅には竹のベッドが置かれていました。部屋の中央には三つの石を置いて造った竈があり、三つの石の隙間から薪をくべて煮炊きをしておりました。

主食は、焼畑で栽培した芋、粟、米などでした。副食は、野菜、魚、鹿や猪の肉な

どで、栄養状態は悪くはありませんでした。山には鹿や猪が沢山いて、駐在所から鉄砲を借りて行って狩をしておりました。

炊事道具は鍋が一つだけで、調味料は一升瓶に詰めた塩があるだけで極めて質素なものでした。初めの頃は、手掴みで食べていましたが、後になると木製の匙や箸を使うようになりました。私が遊びに行くと、芋を焼いて出してくれました。ただ、よくノミやシラミにたかられて痒かったことを覚えています。

タイヤル族は、麻を織って貫頭衣のようにして着たり、インド人のサリーのように肩から腰に巻いたりしておりました。女物には赤の縞模様の入ったものもありました。女の人は、飾りとして貝製の美しく光るボタンを沢山身に付けていました。成人すると、顔には刺青を入れ、耳には穴を開けて耳飾りをしておりました。

昭和3年に小学校に入学することになり、蘇澳に母方の伯母が住んでいたの、伯母の家から蘇澳小学校に通うことになりました。三年生になると、父が南澳の分室に転勤になったので、南澳小学校に転校しました。当時は、南澳分室も小学校も萱葺きのみすぼらしい建物で、子供ながらも驚きました。間もなく、分室や分室主任官舎、それと小学校も新しく建て代わりました。

南澳には、商店や郵便局、マラリア防遏のための病院があり、先住民の子弟のための教育所の近くには公学校と小学校もありました。また、クバポー社やゴンゴ社からの移住民のためのタイヤル族の住居が建てられて、それに従事する人々も大勢来て、南澳も一時はなかなか賑わっておりました。

警察官舎に住んでいましたが、内地人だけではなく、警察で働いている台湾人も沢山住んでいました。日用の味噌や醤油などの調味料、それと食料品などは台湾人の注文取りが帳面を持って毎日来ておりました。私は、台湾人の子供とも良く遊んでいたの、台湾語を覚え、日本語とのチャンポンで話しておりました。

南澳小学校は、全学年20人ぐらいの複式の小さな学校でしたが、同じクラスに台湾人の子供が二人在籍していました。いずれも裕福な家庭の子供で、成績も良く、苛めたり喧嘩したりせずに仲良く遊んでおりました。

一度、上級生の台湾人の家に遊びに行ったことがありました。大きくて立派な家でしたが、お婆さんは纏足をしており、お爺さんはベッドに寝そべて長いキセルでタバコを吸っていました。ただ、今思うと煙が出ていませんでしたから、あれはタバコではなく、アヘンだったのでしょうか。

昭和8年の四月に宜蘭小学校に転校し、一年間寄宿舎で暮らすことになりました。生徒は、ほとんどが蘇澳郡と羅東郡の警察官の子供ばかりでしたが、それなりに楽しい毎日でした。たった一年間でしたが、この寄宿舎のことは今でも忘れられません。

翌年、基隆高女に入学しました。校舎は鉄筋の二階建てで、講堂はありましたが、プールはありませんでした。先生は全員内地人で、女の先生も半分くらいおりました

が、女子高等師範や女子大学を出た方たちでした。一学年二クラスで、一クラス 50 人でした。一クラスに二～三人台湾人の生徒がいましたが、皆医者や先生の娘でした。制服は、セーラー服にスカートで、ズックの手提げカバンを手に、革靴を履いて通っておりまして。髪型は、学年によって違っておりまして。

基隆高女では寮でしたが、六畳や八畳の部屋に三～四人が入りました。畳の部屋で、机に正座して勉強しておりました。勉強が終わったら、机を廊下に出して、布団を敷いて寝ていました。台湾人の生徒も、日本式の寝巻きや布団を持って来ておりました。先輩には「お姉さん」と呼んでいましたが、苛められたことはなく、可愛がられていました。

食事は内地人の小父さんと小母さんが賄っていましたので、日本料理でした。蓬莱米のご飯に味噌汁で、おかずは、沢庵、梅干、野菜や魚、それと肉も出て、お代わりは自由でした。おなががすくと、こっそりお菓子を買って来て、皆で食べておりました。弁当も、寮で作ってくれました。食事の後は、当番を決めて食器を洗っていました。風呂は毎日入れましたが、洗濯は自分でしておりました。

寮では、時間に厳しく、鐘の音に合わせて行動しておりました。毎朝、舎監の先生が点呼して、話をしたりしていました。朝礼では、宮城遥拝をした覚えはありませんが、校長先生の訓話がありました。式日には校長先生の勅語奉読があり、校内神社に参拝していました。また、作法の授業があって、畳の敷かれた作法室で正座して、お茶やお花を習いました。英語の時間もありましたが、私の場合、三年生からは英語ではなく手芸の授業を選びました。

支那事変が起きた四年生の夏頃から、戦争の影響が現れ始め、基隆港から出征して行く兵士を見送ったり、戦死者の遺骨を受け取りに行ったりするようになりました。

在学中に検定試験を受けて、教員の免状を持っていたので、卒業すると、直ぐにタイヤル族の教育所の教員を希望しました。教育所の事情については、子供の頃から山で育って良く知っていましたので、親も反対しませんでした。

昭和 13 年の三月に卒業して、南澳に帰って台北州の雇となり、教育担任として南澳教育所に勤務することになりました。これからが台北州で第一号の教育所の女先生としての生活の始まりでした。教育所は本科四年に、さらに農業科二年があって計六年でした。校舎は割りと大きくて、教室は五～六あったと思います。校庭はありましたが講堂はなく、学芸会をする時は、教室の仕切りを外して講堂として使っていました。

先生は、私の他に男の先生が二人いましたが、身分は全員教育担当の警察官でした。それにタイヤル族の男の人が助教として手伝っていました。ちょうど支那事変の最中でもあり、私なりに一所懸命に努めておりました。

私は、全部のクラスで国語と算術を中心にして教えました。教科書は総督府の編纂

したものでしたが、台湾人の公学校で使っているものよりも易しいものでした。地理や歴史、それと理科などは教科書がなく、国語を教えるついでに触れるぐらいでした。国語を教えるのがやっとなので、歴史や理科を教えても解らなかつたのです。他に唱歌や遊戯、体育などがありました。午前中に学科の授業をして、午後は農業の実習をしておりました。

家に帰っても勉強できるような環境ではないので、宿題は出さず、教科書も学校に置いていました。ただ、子供たちには毎日日記を付けさせていました。教育所では、教科書から文房具まで全部無料で配布していました。家庭訪問はしませんでした。山地では、日中、親は野良仕事や狩に出ていて不在なのです。また、親が教育所に来るということもありませんでした。

生徒の中には良く出来る子もいて、宜蘭農林に入った者もおりました。親がタイヤル族の警察官で、家では日本語を使い、本人は日本名を名乗っていました。その生徒の妹は、私の妹と仲良しでしたが、上級学校に行ったのかどうかは判りません。

私が教育所で教える頃になると、子供たちはタイヤル族の伝統的な服装ではなく、親が内地人の家を回って野菜と交換してもらった内地人の子供の古着を着ていました。女の子には一応ワンピースの制服を決めて、着るようにと奨励しました。ただ、靴は履かず、相変わらず裸足で通学していました。修学旅行で、靴を履いて台北に行ったのですが、皆途中で足が痛いと言って脱いでしまいました。

髪型は、女の子はオカっぱで、男の子は坊主頭でした。床屋には行かず、互いにガラス瓶のかけらで血を流しながら剃り合っていました。カバンなどはなく、弁当は茹でた芋を籐で編んだ籠に入れて持って来ていました。

父がトラックに乗せられて鎮圧に出掛けた悲劇の霧社事件からは10年近く経っていましたので、南澳のタイヤル族は、日本の警察に敵対することはなく、警察の指導には率先して従っておりました。首狩りの悪習も止めて、もう内地人が犠牲になることはありませんでした。

南澳の教育所の隣に、もう一棟青年会館という建物があって、夜間にカーバイドのガス燈を点け、日本語の良く出来ないタイヤル族の大人にも日本語を教えていました。タイヤル族は酒が好きで、大人の男だけではなく、女も子供も自分たちで造った粟酒を飲むので、会館には粟酒の臭いが漂っておりました。

蚊に喰われながらの夜学は大変でしたが、また出征兵士を見送るために、子供たちを連れて分室の前あたりで太鼓に合わせて軍歌を歌っていました。学芸会や運動会の練習をしたりして、結構楽しく過ごしておりました。

昭和14年頃、台北陸軍病院に傷病兵の慰問をすることになり、南澳教育所からも、かねてから学芸会で練習していた「大楠公」と「太平洋行進曲」を演目として出すことにしました。ところが、台北に行くのに引率者は誰もなく、他の人が行ったように

記憶しています。私は自分が行けなかったので、大変心配しておりました。

しかし、次の日の「台湾日日新報」に「大楠公」の写真が大きく出ていて、傷病兵の人たちが非常に感激し、涙を流していたということで、私は嬉しさで胸が一杯になりました。早速新聞の写真を切り抜いて職員室の壁に張り付けました。大楠公の衣装、鎧、兜、他の衣装など、一所懸命に子供たちと手作りをしたことが思い出されます。

昭和15年の三月に、教育所の同僚だった中園と結婚しました。中園は、久留米の農家の末子で、高等科を出てから台湾の姉を頼って台湾の警察になりましたが、山地の教育担当の警官を志望したのだそうです。

結婚して四月にウーライに転勤し、夫婦でウーライのタイヤル族の教育所で教えることになりました。本科四年、補習科二年の教育所で、校舎は木造でした。先生は二～三名おりました。ウーライでは警察官舎に住んでおりましたが、電気が通っていません。ウーライは南澳より開けていて、子供たちのレベルも高かったような気がします。近くに大きな川があって、日曜日には二人でよく釣りに行きました。お風呂は、毎日温泉で、本当に良い所でした。

昭和16年の十月、運動会の日に、主人のところに召集令状が来ました。私は、いったん主人の実家に帰ることになりましたが、それが私にとっては初めての内地でした。二年半ほど久留米におりましたが、昭和19年の三月頃に台湾に戻って、主人の留守中、父母の住むカンケイのタイヤル族の教育所に勤めました。もうその頃は、授業は出来ず、子供たちを連れて作業の毎日でした。

終戦は、父母のいる羅東で迎えました。悔しかったと言うよりは、これで戦争が終わってホッとしたという感じの方が強かったように覚えています。昭和20年の秋、主人が無事復員して来ましたが、国民党の警察官に留用され、羅東の警察課に移りました。給料は国民党から、以前よりも沢山支給されることになったのですが、依然として台湾銀行券で受け取っていました。私も、身分は警察に属していたので、働かずに家にいたのですが、以前の給料を、そのまま受け取っておりました。

終戦後、台湾人は日本語を使わず、台湾語を話すようになりました。羅東にも、国民党の軍隊が進駐して来ましたが、厚い綿入れを着て草履を履き、天秤棒にぶら下げた箆に鍋釜を入れ、背中には唐傘を差していました。日本軍を打ち負かした祖国の軍隊と期待して歓迎に集まった台湾人は、その姿に衝撃を受けて落胆しておりました。

引き揚げて来る際、台湾人の同僚に家財道具を全部渡してきました。主人は山地の教育担当の警察官でしたので、高等課の刑事のように、台湾人から仕返しされるようなことはありませんでした。

昭和21年の三月、基隆から内地に引揚げて来ましたが、今思い出してみると、私の青春は山地の教育所の女先生でした。台湾の山地で生まれ育った私には、これで良かったのだと、今あらためて満足しております。

(35) 日月潭のほとり

石阿松 (民族名 ; キラシ) (1923 年生) 頭社公学校卒 ; 海軍陸戦隊

私は、先住民のサオ族です。祖先は、阿里山のツォウ族から分かれて来たのだと言われています。昔、阿里山から白い鹿を追いかけて日月潭に来たという伝説が残っています。サオ族は、現在 400~500 人ですが、日月潭の周囲に住んでおります。昔は、埔里のあたりまでサオ族が住んでいたそうです。

私の名前の「キラシ」は、実は祖父の名前と同じです。妻の名前の「イスツ」も祖母の名前で、先祖の名前を子供に付けていましたから、私の孫の名前も「キラシ」です。ただ、姓に当たるのはありません。

サオ族には、元来男女とも上の犬歯を抜く習慣がありましたが、私の代からは止めています。刺青もしません。昔は、狩と漁で暮らしていましたが、今では日月潭には魚がいなくなってしまい、漁が出来なくなってしまいました。現在は、山の畑で陸稲、サツマイモやサトイモ、それと豆などを栽培し、観光業で生計を立てております。

サオ族の家は、茅葺で壁は竹で造っていました。地面は掘らずに平で、真ん中に三つの石を置いて竈にし、煮炊きをしておりました。四隅には竹で造った寝台が置いてありました。冬、寝台には藁を敷いていましたが、夏には敷きませんでした。サオ族は、死者が出た場合、家の中に埋葬せず、畑の近くに埋葬して墓の上に石を置いていました。

私の家では、耕作用に水牛と黄牛を飼っておりました。豚も飼っていましたが、台湾人 (*漢族) に売るためでした。また鶏と猫も飼っていました。猫は、家の屋根が茅で葺かれているので、そこに鼠が巣食うのを防ぐためでした。犬は狩に必要でしたから、番犬と狩猟犬を兼ねて家ごとに飼っておりました。

サオ族は陸稲を栽培していましたので、米が主食でした。他にサツマイモやサトイモ、豆なども食料としていました。ただ、粟は栽培していません。おかずは日月潭で獲れる魚や、山で狩をした猪や鹿の肉が主でした。野菜は余り食べませんでした。味噌汁はありましたが、味噌は店から買って来て、ネギやニラなどを具にしておりました。戦争前は食べ物が豊富で、生活は楽でした。生活用水は、日月潭の水を竹の筒で汲んで来て使っていました。戦争中、男の人は国民服でしたが、女の人は着物にモンペでした。

日本時代は電気が通っておらず、ランプの生活でした。風呂はなく、夏は水浴びでしたが、冬は大きな桶に湯を入れて体を洗っておりました。トイレは、庭の外に作ってありました。

日月潭は本来小さな湖だったのですが、日本時代に発電所を造るために堰堤を築いたので、現在のような姿になったのです。私の家は、元々日月潭の下にあったのです。

が、1934年に日月潭のほとりに移ってきた時には、現在のように大きくなっておりました。

日月潭の対岸に涵碧楼という料亭がありましたが、正月には、内地人が集まり、提灯を手にして踊っていました。父は涵碧楼の板場で働いていましたので、日本語が流暢でしたが、母は家にいたので、日本語は少ししか話せませんでした。水社には、また紅茶試験場があって、日本人の職員が働いていましたが、父は職員とも親しく付き合っていました。

サオ族の女の人は、下駄を履いて着物を着ていました。それは、強制されたのではなく、生地を買って来て、内地人の奥さんに教わって自分で縫っていたのです。

私は、10歳で先住民の通う教育所ではなく、台湾人の通う頭社公学校に入学しました。校舎は木造の平屋でした。頭社公学校は日月潭の岬を回った左岸にありましたので、毎朝父が丸木舟で公学校まで送ってくれました。校長先生は内地人で、厳しい先生でした。先生方は、内地人の先生もいましたし、台湾人の先生もおりました。

一学年一クラスで、50人程度でしたが、卒業の時には30人ぐらいに減っていました。サオ族は、5~6名だけでした。女子は、10人ぐらいたったと思いますが、席は男女が別で、左右に分かれておりました。ただ、サオ族の女子は2~3名だったと思います。

一年と二年は台湾人の先生でしたが、三年は熊本出身の内地人の女の先生に教わりました。一年から日本語を習いましたが、最初は難しくて先生の言うことが解りませんでした。ただ、二学期頃からは簡単な日本語が話せるようになりました。成績は上位の方で、先生には可愛がられました。級長はいつも台湾人の子供でした。

先生は、常々「サオ族の子供を苛めるな」と言ってくれていたのですが、低学年の頃、よく台湾人に「せいばん（*生蕃）」と嘲られておりました。悔しくて喧嘩を吹っ掛けていましたが、いつも多勢に無勢で負けておりました。ただ、高学年になると、私も腕力が付いてきたので苛められることはなくなりました。

頭社公学校には制服があって、一年から学生服を着ておりました。入学時に役場がサオ族の子供に限って制服代を負担してくれたのです。ただ、家では伝統的な民族服や台湾服を着ていました。また、サオ族は税金だけではなく授業料も免除され、教科書や学用品なども役場から配給してもらっていました。教科書は家に持ち帰って、ランプの下で勉強しておりました。

帽子はありましたが、靴は普段は履かず、式日の時だけ履いていました。カバンはなく風呂敷が普通でしたが、中にはズックの肩掛けカバンで通う者もおりました。私の場合、四年の時、母方の叔父にランドセルを買ってもらいました。

弁当は、最初は蓬莱米を竹の筒に詰めて持っていきましたが、台湾人の子供に笑われたので、アルミの弁当箱を買ってもらいました。おかずは、干し大根に焼き魚、卵

などでした。家では、木の匙で食べていましたが、学校では箸で食べておりました。

学校の中に入ったら、皆日本語だけで話しておりました。もし、台湾語やサオ語で話しているのを級長が聞きつけたら、級長は先生に言い付けておりました。私は、台湾語は出来ませんが、話すことはありませんでした。

公学校を卒業してからは、家で父の手伝いをしておりました。父は台湾人の仕事を請負って、高山で杉の木を伐採する仕事に従事していました。同級生のうち、台湾人の子供は半分くらいが魚池公学校の高等科に進みましたが、サオ族の子供は誰も進学しませんでした。

私は警察とも仲が良く、警官に情報を提供していました。警官は皆親切で、一緒に魚釣りをしたり、山に猟に行ったりしておりました。ただ、怠けていると、「何してるんだ。怠けるな」と怒られました。

真面目に働いていたので、警官の山城さんに、水社にある電力会社の社員倶楽部でのアルバイトを紹介されました。電力会社の社員とも仲良くなり、お正月には社員の家に呼ばれて、餅を搗いたりして親しくなりました。特に、栗田さんという技師には可愛がられました。栗田さんは、本を買って来てくれて勉強させてくれました。また、社員倶楽部の責任者の奥さんは、色白の美人で優しい人でした。私と同じ年頃の娘さんがいましたが、奥さんに似て美人で、大変歌が上手でした。

18歳頃に試験を受けて、日月潭の監視台の職員になりました。12人が採用されましたが、私以外は全員台湾人でした。月給は一ヶ月40円でしたが、二十歳前の若者としては高給取りの部類に入ります。監視台には軍隊が8人ほど駐屯しており、職員との仲も良好でした。私たちは徹夜で監視していましたが、上官に叩かれたりした覚えはありません。

この頃、「石本キラシ」と改姓名しました。改姓名すれば、配給が内地人並になるので嬉しかったことを覚えています。ちなみに、現在の「石阿松」は、終戦後、国民党によって強制的に漢族名に改名させられたものです。

監視台の兵事主任とは親しく、主任がブヌン族の部落に行って志願兵を勧誘する際、私はブヌン語も出来たので通訳を務めておりました。「もし志願したら、家族は総督府が守るから安心して志願なさい」と説いて回っていたのです。

監視台には相撲場がありましたが、そこで相撲や柔道をしておりました。皆同年代の青年たちですから、忌憚なく付き合っておりました。苛められたりはしませんでした。班長が厳しくて、手を抜いたりすると叩かれました。三年ほど監視台で働いていましたが、昭和20年の6月頃、海軍に召集されて高雄の近くの岡山の陸戦隊に二等兵として入隊しました。月給は、確か8円か9円だったと思います。

二ヵ月後に軍隊に行くという時期になって、父に結婚させられてしまいました。早く孫の顔が見たかったのでしょう。妻は四歳年下で、公学校は四年で中退してしまし

たが、国語講習所で警察官から日本語を習っておりました。

新妻を家に置いて陸戦隊に入隊しましたが、敗戦濃厚の時期だったので、毎日飛行機の修理や軍事訓練をするだけでした。また、艦船に乗って警備に就いたこともありましたが、私たちの部隊は高砂族だけで、タイヤル族、アミ族、ブヌン族、パイワン族などでしたが、台湾人はおりませんでした。どうも台湾人は信用されていなかったような気がします。

陸戦隊では、「海軍精神注入棒」で尻を叩かれるようなことはありませんでしたが、一回だけ上官に気合を入れられたことがあります。それは入隊当時、夜の12時過ぎにトイレに行ったのですが、上官の前を通り過ぎる時に、敬礼をせずに用を足してしまっただけです。出て来る時、呼び止められてビンタを張られてしまいました。内地人の上官は、むやみに叩きませんが、台湾人の上官はよく叩いておりました。

高砂族と内地人は仲が良かったのですが、台湾人とは余り仲が良くありませんでした。台湾人の兵隊は、よく日本の悪口を言っていて、「日本は負けた方が良い。負ければ台湾人の天下だ」などと、台湾語で話しておりました。私は台湾語が解りますが、隊長に告げ口したりすることはありませんでした。

当時は、自分は日本人だと思っていたから、日本のために一所懸命尽くしておりました。仲間と一緒にセーラー服姿で街を歩いた時などは、帝国海軍の軍人として実に誇らしい気分でした。当時、天皇については、学校で教わった通り、日本で一番偉い「現人神」と、文字通りに思っていました。

分隊長から戦況の報告を受けていましたが、南方は皆玉砕したと言うことでした。敗色が濃くなったある日、部隊のみんなで「上海の花売り娘」を歌ったことがあります。上官も敗戦を予想していたのか、隅の方で泣いていたのが今でも忘れられません。

間もなく、岡山で終戦の報に接しました。私は、海軍の一等兵として日本の勝利のためにと全力を尽くしていましたから、悔しくて泣いてしまいました。分隊長も泣いておりました。「これで助かった」とか、「ホッとしました」とかいう気持ちは全くありません。苦難を耐え忍んできたのに、負けてしまいましたから、大変残念だったのです。身内の者が戦死していますから、戦争は確かに辛く悲しいことでした。ただ、私は日本のために働いたことについては、全く後悔しておりません。当時、私は紛れもない日本人だったのです。

終戦後、「お前たちは中国人だ」と言われた時は、全く予想外のことで失望して落胆してしまいました。本音は、ずっと日本に統治してもらいたかったのです。戦後は、ずっと日月潭のほとりで水稲や椎茸、果樹栽培などに従事してきましたが、高血圧で72歳をもって隠居することになりました。

私も妻も、北京語はととても勉強する気にはなれなかったもので、今も片言しか出来ません。普段は、サオ語と台湾語で間に合わせております。宗教は、私も妻もキリスト

教ではなく台湾人と同じ道教の信徒です。

私の娘二人は日本人と結婚して、一人は沖縄、一人は金沢に住んでいます。四人の孫娘たちは、もう大学を卒業しています。今は、サオ族の魂を失わないように、子供たちにサオ語を教えながら静かに余生を送っております。それでも、夜になると昔のことが思い出されて、日本時代が無性に懐かしくなります。

(36) 広東の看護助手

陳(*夫の姓) 郭 桂 (1926年生) 広東陸軍第一病院看護助手

私の実父は、淡水河のほとりの士林に住んでいました。淡水河でシジミを取ったり、サトウキビを栽培したりしておりました。父は漢塾に通ったので、漢字は知っていました。実母は無学で、纏足をしておりました。私の姉妹も無学で、学校に入ったのは私だけでした。

私は八人きょうだいの6番目でしたが、私の姉妹は、姉を除いて全員養女に出されました。娘三人を養女に出した代わりに、他家から「媳婦仔(*シンプア)」として娘二人を養女に迎え入れておりました。兄たちの将来の妻にするためでした。

ただ、実家の長兄は、海南島に行って現地で結婚しましたから、媳婦仔の人は他家へ嫁いで行きました。次兄も、媳婦仔の人との結婚を望まなかったのも、その人は他家に嫁ぎ、次兄は別の女性と結婚しています。

私と妹たちも、媳婦仔として養女に出されました。昔は、娘は養女として他家に出すのが普通だったのです。おそらく専門の仲介者がいたのでしょう。

私の養父は、漢方の薬局を経営しておりました。養父は漢塾に通いましたが、老松公学校も修了していますので、日本語は流暢でした。養母は全くの無学でしたが、纏足をしていて壁を伝って歩いておりました。

養父は可愛がってくれましたが、養母には娘がいたので、それほど可愛がってくれませんでした。ただ、苛められたりはしませんでした。養家も八人きょうだいでしたが、男は四人で、全員中等学校に通っておりました。兄の二人は、夜間の私立学校である成淵学校に通っていました。

私は、妹たちと違って幸運だったことに、8歳の時に、永楽女子公学校に通わせてもらいました。公学校は、一クラス50人くらいで6クラスでしたが、私の組だけでも4~5人の養女がおりました。

一年の時から日本語を習ったのですが、三年生になるまで先生の話す日本語が解りませんでした。一年の頃は、他の友達も日本語が解らないようでした。単語は解っても、長い文章になると、解らなかったのです。

三年生になってから、一所懸命勉強したので、ようやく先生の言うことが解るようになり、文章の形でも話せるようになりました。今考えると、落第していた人がいま

したから、日本語が良く解らないのに、落第せずに三年まで上がったのが不思議なくらいです。高学年になっても、休み時間には台湾語で話していましたから、先生に見付かると叩かれました。

私はおとなしかったのですが、どういうわけか、よく先生に拳骨や物差しで頭を叩かれました。おそらく、私が媳婦仔だったから叩かれたのではないかと思います。五年生になると成績が上がって列長になり、段々と叩かれなくなりました。

成績は、50人中10番くらいでしたから、養父は女学校に行ってもいいと言ってくれたのですが、養母は行かせてくれませんでした。それで、公学校を卒業してから、内地から女学校の講義録を取り寄せて勉強していました。

卒業してからは、五年ほど店の手伝いをしておりました。養父は阿片を呑んでいたもので、体を悪くして仕事をしなかったのです。それで、私が店番をして、医者の方から従って計り売りをしていました。

養家での私の将来の夫は、私より二歳上の次兄でした。公学校に入った頃から、人に聞いて次兄が将来の夫ということが判っていましたが、私は嫌でした。次兄も私のことを嫌っていたようです。それで、公学校に入ってから、同じ家で暮らしているながら次兄と話をした記憶はありません。次兄は夜間の成淵学校を出て、熱帯医学研究所に勤めておりました。

私が看護助手に応募したのは、白衣に憧れたこともありましたが、家から離れたかったからです。戦時中だったので役場の人が来て、「お宅は男の子がいないから娘さんを看護婦に出しなさい」と勧誘していましたが、私は自分から志願しました。親の中には、「帰る時には赤ん坊を背負って帰って来る」と言って、反対する親も多かったのです。ですから、合格した人の中にも、何人か親の反対に遭って来なかった人もおりました。

私は昭和18年に応募して、一般常識の試験と面接を受け、無事合格しました。しかし、養父の強い反対で行けませんでした。それでも諦めず、19年にも応募して再度合格したのですが、今度は養父も反対しませんでした。次兄には、全然相談せずに応募したのです。

私は「武内佳子」と日本名を名乗ることになり、二ヶ月ほど台北の馬偕病院で訓練を受けました。ただ、看護の実技の訓練はなく、精神訓話が主でした。実際の訓練は、広東の病院に配置されてからでした。志願した人たちは、公学校卒、女学校卒、学校の先生など様々でしたが、全員台湾人で、平均は18歳ぐらいでした。

四月に行く予定でしたが、高雄で一ヶ月足止めを喰らいました。何でもアメリカの潜水艦に撃沈される虞があるということで出発が延期されたのですが、毎日遊んでばかりでおりました。五月になってから、香港経由で広東に向かいました。広東では、陸軍第一病院に配属されました。

仕事は看護婦の補助で、包帯交換や注射、洗浄、夜間の見回りなどでした。時には

亡くなった兵隊さんを担架で運んだりもしておりました。月給は、巡査の本俸が 40 円ぐらいの時代に、戦地手当が付いて 100 円にもなりました。25 円は家に仕送りしましたが、25 円は軍事貯金に入れさせられました。残りの 50 円は小遣いでしたが、二週間に一回外出して、せいぜいおはぎを買って食べるくらいでした。志願の時点では、給料が 100 円だとは全然知りませんでした。他の同僚たちも知らなかったようです。養家の漢方薬店で働いていた時は、一銭ももらっていなかったのです。

第一病院では、一部屋に 6 人が入っておりました。食事は一膳飯に野菜でしたが、ひもじいとは思いませんでした。風呂は宿舍の側にあつて兵隊の後に入っていました。服や靴は配給で、洗濯は自分でしておりました。夕食の後、就寝までは自由時間でした。皆おしゃべりをしていましたが、私は余り話しませんでした。ただ、仲が悪かったわけではなく、それなりに楽しい毎日でした。一番怖かったのは、婦長さんに苛められることでした。

40 代の婦長でしたが、将校と親しくなつて、夜ごと枕を抱えて将校の部屋に通っているという噂がありました。戦地でも、ロマンスがあつたということです。ただ、看護助手と兵士との間で問題になつたということは、聞いたことはありません。

私が看護助手として広東にいた時、次兄は軍属としてフィリピンに送られたのですが、船中で肺炎になり、マニラに着いた途端に病死してしまつたのだそうです。その報せを聞いた時、次兄のことは嫌いだつたはずなのに、なぜか人目も憚らず大声で泣いてしまいました。

日本の敗戦の報せに接した時は、「これで台湾に帰れる」と思つて嬉しかつたのですが、ただ、中国人になると聞いた時は、嫌で堪りませんでした。

台湾に帰つてからは、看護婦の仕事はせず、店の仕事を手伝つておりました。長兄の妻が亡くなつたので、皆に長兄と結婚したら良いと言われました。長兄は私のことを気に入つていたようなので、私が断ると、長兄は烈火のごとく怒りました。それでも、私は全然結婚する気がなかつたので、長兄は諦めたのか、他の女性と結婚してしまいました。ただ、私が家にいたので、長兄と兄嫁は、毎日のように私のことで喧嘩をしておりました。結局、二人は離婚してしまいました。

広東から帰台して、翌々年に 22 歳で結婚しましたが、夫は外省人でした。ただ、アモイの人でしたから、台湾語が通じ、習慣も似ていましたので、違和感はありませんでした。何でも警察学校を出て、アモイで学校の先生をしていたそうです。日本語は全然出来ませんでした。北京語は流暢でした。

計らずも、外省人と結婚することになりましたが、夫は寡黙な人でしたので、この年になるまでさほど波風を立てずに過ごしてきました。今では、これも前世からの何かの縁だつたと思つて、余生を過ごしております。

〈続〉